

浮き沈みの中でも

道を見失わないこと

新世界内観研修所

フランク・リッター

新年おめでとうございます。

昨年は私どもにとって、個人的にも経済的にも大きな困難をかかえた、大変厳しい年でした。

研修所を財政的に支えている私の本来の仕事が大きく落ち込む一方、冬には息子がプールに落ちて溺死寸前になり、秋には父との永遠の別れがありました。これら三つのできごとは、如何に人生がうつろいやすいか、その人生を有益なものにするために、我々は如何に全力でもって生きなくてはならないか、ということを教え



てくれました。

内観をしていたお陰で私は、安らぎの中で父に別れを告げることができ、心の底から、父の更なる道における幸せを祈ることができました。息子も、後遺症もな

く元気になりました。経済的にも不振を脱し、以前のようにたくさんのお仕事をかかえ、研修所を維持していくことができるようになりました。

しかし一方で、私がいかに多くの時間を本質的でないことでいつも無駄にしているかに気づきました。そして内観研修所を続け、内観を人々に提供することが私たちの使命であるということ、私たちが夫婦は今まで以上に確信しました。

昨年は内観者の数がその前年より減りました。

しかし、今は再び、内観への関心が高まってきております。

このような浮き沈みの中でも自分たちの道を見失わないこと、これこそが私たち夫婦が今しなくてはならないことだと思っております。

そういう時に、主として石井さんをおして与えられる、日本との精神的な繋がりが、私たちにとって大きな助けとなります。森さん（森一格ビッグバン・スポーツセンター会長、訳者注）が、昨年私たちを訪ねてくださった他、多くの日本の友人の皆様からもごあいさつやお便りをいただきました。とても感謝しております。そういう意味で日本の内観フレンドの皆様に、常に山あり谷ありの人生の中で、強い気力と変わらぬ信念をおもちくださるようお祈りいたしております。そうすることによって内観がさらに広がり、より多くの人々のもとに届くようになると思うのです。

（石井 光・訳）

◆特集◆—新しい年の抱負—

種、もし大地に

蒔かれずんば

ヴォルフエンビュッテル内観研修所

ゲラルド・シュタインケ

神性の火花は、すべての人の中にあります。しかし、それが光として現れ、炎にならなければ、これに自ら気づかず終わってしまうことが多いのです。

内観をすることにより、人間はまどろみから目覚め、自らの中にある神性に気づき、それを養い、成長させ、花咲かせることができます。

種は大地に蒔かなければ成長することはできません。あらゆる可能性を内に秘めてはいるも

の、成長発達への正しい条件が整えられなければ、この可能性は隠されたままです。

内観の三つの質問の助けにより、この正しい条件が産み出されます。

しかし、人間がこれらの事実気づかず、自ら求めることを開始しなければ、種は最後まで眠ったままで終わるでしょう。生きているうちにこの事実気がつかない人はたくさんいます。しかし、それではバックに入れられて売り場に横たわったままの種のようなものではないでしょうか。

人間は鎖から解き放たれて自由になることを欲しなくてはなりません。内観はこのことを可能にする効果的な「道具」なのです。

そのことを願いさえすれば、人間はありとあらゆる種類の助けを得ることが出来るでしょう。



しかし、まず「願い」が人間の中になければならないのです。

吉本先生ご夫妻はじめ、内観をおこなうことを可能にしてください。くださったすべての人々に感謝します。そして、日本の内観者の皆さま、内観に興味をお持ちの皆様、マルティーナと私より心からのご挨拶をお送りいたします。

(石井 光・訳)

◆特集◆—新しい年の抱負—

新しい年、『やすら樹』の内観

—編集部からのごあいさつ—

『やすら樹』三歳の新春、ありがとうございます。

いま、創刊号のページを繰りながら、当時の「初心」をかみしめています。

創刊号発刊の足どりをふりかえってみます。——一九九〇年の初めに、内観の普及を広く行なうために「自己発見の会」が誕生し、その機関誌『やすら樹』の構想が、一月二〇日の第一回の編集委員会で決まり、その後、何回かの会議と編集作業を経て、四月三〇日の発行となりました。

創刊のころを歌い上げるものとして、

十億の人に

十億の母あれど

わが母にまさる

母あらめやも

の詩が、いのちの誕生、母、内観のイメージとしてふさわしいので、編集スタッフ全員的一致で、巻頭を飾ることとなりました。

『やすら樹』編集長

市川 富雄

創刊にかかわる味わいの深い文章も寄せられています。

◇「道行く人にもこの内観をすすめた」とは、父・伊信の口癖でした。……内観をしたことのない私が、このような役につくのは間違っているように思うのですが……「内観の邪魔だけはしてくるなよ」と言われたことを肝に命じて、出来るだけのお手伝いをさせていたただきたいと思います。

(自己発見の会会長 吉本清信)

◇……ここに新しく内観普及の会が、学会とは一応別の組織として誕生したことは、まことに時宜を得た企てであり、学会会長として私も大いに喜んでおります……。

(日本内観学会会長 村瀬孝雄)

◇自分がよく知らない人と人生をともに過ごしていくといふのは、もちろんバカげたことです。しかし、その「よく知らない人」とは、「自分自身」のことではないでしょうか。……自己の本来の姿とは——他者によって命を与えられ、他の人々とともにあって生かされ、他の人々

に与える人生の中にその最高の意味を見いだす——そのような姿です。

(「自己発見の会」の設立を祝う)

オーストリア内観協会会長 フランツ・リッター)

そして「いろいろな世代がいる編集スタッフですが、若い力が推進力となり」(創刊号「編集後記」)『やすら樹』は船出をし、いまでも一筋の航路を進んでいます。

『やすら樹』を内観しましょう。

この新年号までの一七冊と別冊の二冊は、積み重ねて四センチ弱の厚さですが、私たちにとって貴重な宝であり、愛すべき分身であります。

創刊から二年八か月、その時々の一冊一冊には、さまざまの方々のまごころと情熱がこめられ、きらきら輝いています。どれだけの方々のお世話になっているのでしょうか。

『やすら樹』の誌名が決まるまでの長い議論。その表紙文字を幾度も墨書した方。『やすら樹』という樹の写真や巻頭のことばをさがし求める方々。そのような「ことば」を残してくださった先覚の人々。

もとより原稿やカットを書いてくださる方々、またワープロを打ち紙面を作り上げる方々——みなボランティアの心に

支えられています。

印刷所の方々——木造の階段を上って腰をおろすと、もうお茶をお持ちくださるのです。

汚濁に充ちた世の有様ではありますが、私たちは内観によって、人間のすばらしさを見て生きることができのです。

新しい年の訪れは、自分の生き方を見つめるにふさわしい時をもたらします。

まっすぐに人生と向きあうとき、今なお心の底に湧き出る疑問を避けることができません。

何のために生まれ、そして生きるのか。

吉本伊信先生は、内観によってこの疑問は解決されると言われました。

内観者は、「生かされて生きている」ことに気づかされ、「真実の私」に出あうことができるのだと思います。

内観で感じ得た自分についての正しい認識と、お世話いただいた方々への感謝の心が、時として薄らぐことがないように、私たち仲間どうしの励ましの声を『やすら樹』は送り続けてまいります。春、夏、秋、冬の風を受けながら、内観の光のなかで、真実を見つめてまいります。